

在満作家青木實
——「満人もの」、そして戦後——

岡田 英樹*

はじめに

「満洲国」（以下括弧を省略）の日本文学を論じる場合、青木實は外せない存在であろう。それは、14年に満たぬ短命に終わった満洲国にあって、1932年10月から42年12月まで文芸同人雑誌『作文』刊行の実務を担ったこと。そして日本の作家に向かって、「満人もの」を書くことを強く主張し、みずからも実践して多くの作品を残したことによるだろう。「満人」とは、在満中国人を指し、当時中国人の一般的呼称であった「支那人」と区別していた。ここではそうした青木實の文学について考察する。まず『作文』（97年9月）に掲載された「青木實略年譜」（24、25頁）をもとに、かれの略伝を紹介しておく。

- 1909年4月4日（以下19を省略）東京市下谷区金杉上町に生まれる
28年3月 法政大学商業学校卒業
同年4月 満鉄東京支社入社
30年12月 満鉄大連図書館司書に転勤、渡満にともない、東洋大学夜間部文学科中退
32年10月 同人雑誌『文学』（第3輯から『作文』と改題）創刊、発足時同人に安達義信、落合郁郎、小杉茂樹、城小確（本家勇）、島崎恭爾、町原幸二（島田幸二）
33年4月 熊沢七重と結婚

* おかだ・ひでき 立命館大学名誉教授

- 40年4月 奉天鉄道総局愛路課に転勤
- 42年12月 『作文』終刊（全55輯）
- 46年9月 日本へ引き揚げ
- 50年7月 国立国会図書館主事
- 64年8月 『作文』復刊
- 97年4月20日 逝去（享年88歳）

なお、復刊『作文』は、青木の後を秋原勝二（渡辺淳）が引き継ぎ、かれが亡くなる2014年7月（第208集）まで継続された。青木が満洲時代に刊行した作品集には、以下のものが確認されている。

- (A) 『花筵』（随筆集）大連詩書倶楽部 34年12月1日
 - (B) 『部落の民』（随筆・小説集）満鉄鉄道総局附業局愛路課 42年3月31日
 - (C) 『北方の歌』（小説集）国民画報社 42年12月10日
 - (D) 『幽默』（随筆・小説集）作文社 43年4月25日¹⁾
 - (E) 『文芸時論集』（評論・随筆集）奉天大阪屋号書店 44年8月25日
- （以下、必要に応じて本文中の引用はその記号を使う）

1. 「満人もの」

青木が「満人もの」の代表作家と呼ばれるのは、在満中国人を素材とした多くの作品を残していることはもちろんだが、中国人を描くことを、日本人作家の「当為」として強く主張したことである。中国人社会を描くことのむつかしさを語りながら、それでも満洲国にあっては中国人の内面に食い込んだ創作に努力すべきだと繰り返し述べている。ここでは『新天地』（18-1 38年1月）に発表された評論「“満人もの”に就て」を紹介する。

まず「日常の生活の上で、僕らが意識するとしないと拘はらず、満人との間にもつ交渉といふものは絶大である。一言にして言へば我々の生活は、総べて満人の上に成立してゐるといつても過言ではない」（99頁）として、満洲国にあっては、衣食住すべての面で、圧倒的な数を占める中国人の働きによって成り立っているとの認識を示す。そのうえで、その中国人の置かれている相対的な地位についてこう指摘する。

我々が、他人からバカ！と突然怒鳴りつけられてもそれに対して、静かに詰問することも亦時には高飛車に反抗的になれやう。しかし被害者が我々の周囲の満人諸君であるときはどうであらうか？仮に彼に言ひ分あるとしても「暗い沈黙」を守つてしまふ場合が多い。内心はどうあらうと、表面的に反抗したり、理屈を主張することは少い。彼らが知識的分子であれば、一層その「暗い沈黙」は根深い禍^マ根^マを形造つてゆく。（中略）

感情の相克ばかりでなく、利害の衝突、これも亦民族的対立の上には避けられない。文学の徒が、理非曲直の正義派であるからは、人種を異にし^マようと正義に組みしなければならない。（100頁）

それでは一体満人の内の、如何なる階級に属する人達を対象として書かうとするのか。平々凡々たる庶民の群をである。戦争があらうと、内乱があらうと、匪賊が往^マ行^マしやうと、旱害、水害、虫害に怖びやかされやうと、国家が変らうと、物価が奔騰^マしよう^マと、小さい蝸牛のやうな一家の生活を黙々と守り、いつの世も多く恵まれるといふことをしらないし、途^マ断^マへるといふこともない庶民の生活にこそ親愛なものを感じ、書きまくりたい無限の魅力もある。（101頁）

青木の人道的正義感とでもいうべき性格がよく表れた評論である。中国人の「暗い沈黙」の中に民族対立の禍根が蓄積されると指摘する。別

の文章では、「満洲で小説を書くものに与へられた一つの義務であると自分は信じてゐるものである」²⁾とまで言い切っている。こうした強い正義感と義務感から生み出された「満人もの」を、そのテーマから三つに分けて紹介してみたい。

1-1 農事合作社運動

短篇小説集（C）には、北満農事合作社運動に取材した作品が多くまとめられている。そうした一連の作品の創作動機を、青木はこのように語っている。

満洲の農村に対して、何等実際的な見聞ももたない僕が、好んで農事合作社の問題などを小説の上を選んできたのは、農事合作社の仕事こそ、その運用の如何によつては日工、年工といった農業労働者を負債から救ひ、いつの日か彼らが渴望する耕す自分の土地を与へ得ると信じたからであつた。その農事合作社の仕事を実際に見、僕の小説に生々しい息吹きを与へたいといふ気持ちだが、僕を綏化に行かせた。³⁾

書物で私は北満の綏化に一点の灯のやうに燃え上がった農村協同組合運動を知り、またその主眼が勤勞農民の幸福に置かれてゐたことに、なにか私のひそかに理想としてゐたものが形象されたやうなふかい悦びを感じ、いくつかの合作社運動に取材した小説も書いてきた。⁴⁾

中国東北の農村は、農産物流通機構を一手に掌握した糧棧（問屋）制度によって成り立っていた。地主・商人（糧棧）・高利貸しという三位一体の土豪劣紳によって、農民たちは搾取され抑圧されてきたのであった。

この伝統的制度にくさびを打ち込むため満洲国政府は、34年に金融合作社、37年に農事合作社を立ち上げて農村市場の統制を図ろうとした。橋樑が唱える「新重農主義」の影響を受けていた佐藤大四郎は、濱江省綏化県に入り、この農事合作社運動に農本主義の理想を実現しようとする。農村に小作農や雇農を中心とした実行合作社を組織し、かれらの自立を促すことで古い糧棧制度を切り崩そうと考えたのであった。かれらの運動は「北満型農事合作社運動」あるいは「濱江コース」とも呼ばれ有名となるが、40年、金融合作社と農事合作社が興農合作社に統合されることで、佐藤らの夢は絶たれた。さらにこの運動にかかわった人びとは、41年11月、関東軍憲兵隊によって「在満日系共産主義運動」の罪名のもとに一斉検挙された。

青木は、貧農救済、農民の自立といった運動の趣旨に共感して、創作への意欲を掻き立てられたと思われる。以下その作品を紹介する。判明したものについては、その初出を示しておく。

「農業倉庫」『作文』39年5月

春耕資金の信用貸し付けを受けた××屯の実行合作社信用股長を務める曹福栄から、水害のため収穫が減り、貸付金回収を延期してほしいとの要望が出された。県合作社職員の芳川が被害状況を調査するため村に入る。初期合作社運動の混乱した状況と、農民の理解を得ることの困難さが描かれる。曹が提出した正確な被害報告が認められ、返済の一年延期が了承された。

「農事合作社職員の手帳」『協和』39年4月

上記と同じ任務を帯びて××屯へ向かう途中の合作社職員の「私」が、トラックに乗り合わせた警察所長とその運転手から村の治安工作と匪賊に遭遇したエピソードを聞く。

「屯のはなし」

第一話『協和』39年8月

地主の小作をしながら、盲目の父と女房、さらに3人の子供を養っている馬良元は、新しくできた金融合作社が無担保、低金利で現金を貸してくれるとのうわさを聞く。しかし合作社の融資金は、地主の手に握られており、救済を必要とする貧農の所には回ってこない。

第二話 41年1月

白菜漬けに必要な塩を農繁期の日をつぶして街へ買い出しに行き、雑貨商へ持ち込んだ大豆を安く買い叩かれる馬大徳。青田買いで手に入れた金で、10数頭の子豚を買って飼育していた周徳明は、豚ペストで全滅させてしまう。こうした貧しい村にも、農事合作社の宣伝工作隊が入り、農耕資金の無担保金融、日用生活必需品の共同購入、農事改良指導といった政策が熱っぽく語られ、貧しい農民たちに一縷の希望の光が差し込むのであった。

第三話 41年1月

実行合作社が作られたばかりの屯の話である。生活も便利となり、穀物も正当な価格で買い上げられ、村人の生活も安定してきた。しかしその裏で、不正も生まれてくる。村の購買股長は共同購入した生活用品を県城まで引き取りに行ったことを理由に各家から3銭ずつを徴収した。また合作社から借りた資金を、かさ上げた金利で貧しい農民に又貸して儲ける者もあらわれた。

ここまで紹介してきた作品は、農事合作社運動を描いたものだが、いずれも習作に近い短篇小説といえよう。これらの作品を集大成するかたちで、「北辺」⁵⁾が書かれた。これは(C)全体の半分以上の頁数を占め、

青木には珍しい4部構成からなる中篇小説である。

××県農事合作社に働く主人公秀島は、左翼運動から転向して満洲に流れてきた青年である。張学良政権の政策に批判的であった金山子屯の地主王秀忠は、秀島らが進める合作社運動に理解を示し協力的であった。一方、糧棧福裕号を営む柳河堡子の地主劉玉東は、合作社の運動を目の敵にしている。劉は、王秀忠が匪賊に寝返ったとのデマを流し、討伐隊が金山子屯を攻撃する事態となる。秀島は対峙する王のもとへ身を挺して駆けつけ、双方の誤解に基づく対立を解消した。こうした筋書きを縦軸としながら、秀島を満洲へ招いてくれた学友本間健一参事官の匪賊帰順工作中的の壮絶な最期、日本料亭で働く仲居みち代との恋愛などが描かれ、小説としての感銘を与えている。

なお、金融合作社が行なっている、土地を担保とした地主や富裕層への金融政策では、農村の矛盾は解決されない。実行合作社を作り農村の実態を踏まえた貧農への無担保、信用貸しこそが農村救済の道である、と秀島が強く主張する場面が描かれているが、これは経済部金融合作社と産業部農事合作社との根強い対立の一端を踏まえたものである。

興農合作社中央会の雑誌『興農』の編集者であった上野市三郎は、(C)を取り上げた「書評」で、このように手厳しく批判する。

この作家の逞ましい作家意識と視野の広さは相当高く買はれていゝ。しかし、個々の作品についてみるときは、概して芸術的完成から遠いことが指摘される。

(中略)

素材的興味が露骨で、概念的でなる。すこし極端な言ひ方をすれば、パンフレットの知識に一応の粉飾^{ママ}を施したにすぎないやうなものさへなる。^{ママ}6)

手厳しい評価ではあるが、中篇小説「北辺」以外は、合作社の政策が語られるだけで、それを肉付けする叙述がない。工作の対象とされる農民像も画一的で、個性が感じられない。上野の「芸術的完成から遠い」との評価は受け入れざるを得ないであろう。

なお(C)には、後述する「青服の少女」、「砂塵」、「不幸について」も収められているが、「満人もの」とはちょっと言いがたい「呼倫貝爾」(39年12月)という作品もある。

大学生安藤次郎は夏期休暇を利用して、ホロンバイル高原にある恵東公司以て実習生活を送ることになる。この会社は農場経営とともに、森林の伐採事業を行なっている。安藤は冬に伐採した材木を、河に流して流送する仕事に就く。27人のカザツク人夫を監督するのは「一人は満洲事変に出征して匪賊の二、三人は射ち殺したことのあるといふ兵隊上りの男で、もう一人は北満で長いこと憲兵をしてゐたといふ」(17頁)屈強な二人の男であった。かれらの人使いは乱暴で、人夫がもたついていると容赦なく河に突き落としてしまう。蒙古人のオボ祭りでは、招待された日本の知名人士が横暴にふるまい、記念写真を撮るときには、写真館グリゴリーの新妻とその妹を無理やり両腕に抱きすくめて写真に納まろうとする。白系ロシア人グリゴリーと親密になっていた安藤は、いたたまれなくなって二人を救出する。撮影後、その有力者の取り巻きから「我々が許可証を取り上げたら、彼らは商売は出来んのですよ。」(26頁)と恫喝される。

こうした表現は、その後の検閲で、削除されるのだが⁷⁾、青木が最も嫌悪した日本人の異民族に対する優越感、傲慢さへの憤りをストレートに吐き出した短篇として、評価に耐える作品である。

1-2 愛路運動

青木は40年4月、奉天にある鉄道総局殖産局愛路課に転勤となる。

そのころ私は、鉄道総局内でも一風変わった仕事に従事していた。満洲全体の一萬キロを突破した鉄道沿線の、その沿線住民を鉄道側の味方につけるための工作の元締めだった。

満洲国軍の中には、鉄道警護軍という特殊任務をもった部隊があり、私たちの仕事はそれと合作によって成立していた。⁸⁾

その愛路課宣伝係主任は大庭武年で、その下で青木は月刊誌『愛路指導者』、『大東亜戦争宣伝資料』の編集を担当し、機関誌『愛路』（中国語月刊誌）に投稿もしていたという。

この愛路課宣伝係に移ることで、大連図書館時代には無縁であった沿線住民を組織しながらの愛路運動をテーマとする創作が可能となった。それらの作品をまとめたものが（B）である。これは「随想」6篇、「小説」7篇からなる作品集であるが、作品の舞台となるのは、鉄道警護分所と呼ばれる直接農民と結びついた愛路運動の現場である。以下は青木自身が解説する分所の役割任務である。

鉄道沿線両側各五軒以内の村落を指定して鉄道愛護団を組織し、村長を団長に、村民をすべて任意に団員とみなしてゐる。匪賊情報を駅の鉄警分所に連絡させ、また洪水、脱線等には自発的に出動して、復旧の応援をし、団員は交替に線路を巡察して匪賊の妨害などを未然に防いでゐる。

さういふ沿線農民の労に対して、鉄道側では、優良種子の配給をしたり、映画班を出して娯楽に恵まれない農村に慰安を与へたりしてゐる。⁹⁾

もちろん青木は奉天の「元締め」であり、鉄警分所の経験はない。各地から送られてくる報告書や、時には現地視察に赴いてみずから見聞し

た事象やエピソードを素材として小説に仕立て上げた。「随想」にはこうした小説の素材となるメモ風の文章がまとめられているのだが、ここでは7篇の「小説」に注目する。

「鉄警日記」『満洲』41年4月¹⁰⁾

日本人分所長とその妻、2歳になる長女、それ以外はすべて中国人農民という寒村の鉄警分所長の日記である。匪賊出現の報が入り、愛路義勇隊を召集して夜間線路巡察を指揮するといった事件以外は、ほとんど起伏のない日常生活が描かれている。しかし、言葉の通じない中国人に囲まれ、熱を出した幼子に心を痛める妻の心細く寂しげな姿に鉄警分所の厳しい生活が窺われる。

気になったところがある。密偵がもたらした情報「忽有大青蛇、一条長可一丈、其妻見之、幾乎嚇死、然並未傷人而逃」を、「細君はびつくりして驚きのあまり死んでしまった」と解釈し、「事実をたしかめたその上で、弔間に出かけてやろうと考へる」(68頁)とあるが、「嚇死」は「びつくり仰天した」といった意味である。

「部落の民」

小作人洪海昌は、山東省の同郷人で固められた村にあって、山西省出身の新参者であったため、村人からのけ者扱いされている。しかし、かれは熱心な鉄道愛護分団員であった。ある日、かつての村で匪襲を受けたときの匪賊の男を見かけて鉄警分所に通報する。匪賊一味は逮捕され、洪は表彰されるとともに、村人の尊敬と信頼を受けるようになる。

「濱洲線にて」『協和』41年1月

龍泉泡村が匪賊集団に占拠されたとき、鉄路愛護分団長寧万祥は、弟が人質にとらわれているのを知りながら、村を抜け出し警護分所へ匪報

を伝える。匪賊は一網打尽となるが、弟は匪賊に射殺され犠牲となった。

まったく同じテーマで「語り艸」『蘭花香る国』吐風書房（42年5月）が書かれている。こちらの美談の主は、龍泉泡の分団長方君となっていて、叙述が細かく、単純な英雄像とはなっていない。方は表彰を受けた後も、村に帰ろうとはせず、弟を犠牲にしたことへの屈託を抱えて悩み、最後には鉄道の仕事に就きたいと申し出る。以下は、方君の心を思いやる「私」の心情である。

方君が判つきりと国家意識を持ち、自分の弟を犠牲にして連絡したことがお国の役にたつたのだといふ考へ方でもしてゐてくれたら、彼の嘆きといふものも自ら別箇の形をとつてゐたらう。ところが現実の方君の気持には肉親の弟を失つた、とんだことをしてしまつたといふ以外にないのだから、精神的にも救はれないのである。（203頁）

日本人側の「私」の願望が述べられるが、その裏には中国人「方君」の絶望が隠されていて、それは「私」の手が届かぬ世界である。

「未明の屯」

（C）所収の「屯の話」第二話と同作品であるが、馬大徳が街で鐵路愛護団の表彰式に遭遇し、かつて宣伝隊として村を訪れた巡警や分所長と会話を交わす場面が挿入されている。

「承古線」『新天地』41年11月

承德と華北の古北古を結ぶ鐵路を走る「厚生列車」の活動を描く。沿線住民の慰問と愛路宣伝を兼ねたキャンペーン列車で、主な駅で演芸や映画、そして雑貨の即売を行なっていく。しかし作品には、慰問行事は全く描かれず、華北と満洲を往来して密輸にかかわっていると疑われる

怪しげな日本人男女の描写が中心となる。

「屯の挿話」『満洲観光』40年3月

熱心な愛路義勇隊員である王万福が、街へ出て酒を飲み、2、3人の「鮮人」と喧嘩となり殴られて逆上し、気が狂ってしまったという。分所長の「私」は、深夜にもかかわらず王家に出向き、興奮して暴れる万福の気持ちを落ち着かせてやり、村人から称賛される。

「分所生活」

分所長の日記。鉄路愛護協和青年団の再編成に取り組む苦労話。

「農事合作社運動」も鉄道を警護する「愛路運動」も満洲国建設の重要な政策であった。こうした政策が実施される現場において、農民がこれをどう受け止め、また指導に当たる日本人がどのように苦闘しているかを描こうとした。

先に引用した「“満人もの”に就て」の中で、青木はこのような思いを述べている。

彼らが口に出して言ひ得ざることを代弁し、(といふことは、良き意図のもとに発するもののみに限ること勿論である。)彼らの真実の生活面を描写し、若し為政者をして何らか反省し、参考の資ともなれば。これも亦一面の利であらう。(102頁)

先に「北辺」で紹介した、「金融合作社批判」などもその一例であるが、作者は農村政策の不備や、政策がゆがめられ、また村民に浸透していかない現状を訴えている。匪団は農家に泊まらず、道案内させた農民には20円、30円とお金を握らせるので匪団の動きがつかめない現状「濱洲線

にて」。統制された日用品が配給制度では円滑に回らず、闇買いに走らざるを得ない状況「農村の表情」。国兵法が施行されてからは若者が徴兵を忌避して、年齢を高く偽る風潮があること、愛路課が月2回発行している「愛路壁報」も文盲が多く、字の読める農民も、流言蜚語を放つ者と疑われるのを恐れてあまり内容を語ろうとしないこと（以上「分所生活」）。これらは現場から掬い上げた為政者への政策提起であろう。

こうした政治と向き合った「満人もの」に対して、『作文』創刊時から
の同人であり、大連図書館の先輩でもあった竹内正一は、思いやりあふれる温かい口調ながら、青木作品の欠点を鋭く指摘する。

特にこの国の人口の大部分を占める農民層について、これをある時には、為政者と一緒になつて、又ある時には更にそれ以上に、深く鋭く、考察し批判し観察して、その作品の中に情熱を以てこれを盛り込み、そこに自己の満洲に在つて文学することの悦びを発見しやうとする作家は、今のところ君より他には無いのではないかと思ふ。（中略）異民族への理解を高めるためと云ふ強い意欲の程が窺はれて、私は頼母しく思ふのであるが、同時にこの意図が余りに性急に作品のなかに手軽に首を突き出さうと焦つてゐるやうなところに、青木君のこの系列の作品群の最も大きな欠陥が感じられると思ふのである。

これは青木君の文学にとつて、一つの大きな危地であることを感じさせると共に、このやうな時代に生まれて、このやうな世情のなかで文学するものにとつても亦、等しく考慮しなければならないところではなからうか。（中略）そして嘗つて数年前「花筵」のやうな極めて情感の溢れた美しい小品散文集を著はして私たちを感動させた青木君が、現在最も強い情熱を傾注しつゝある自己の文学方法の、最も大きな欠陥を知らぬ筈もなく、気のつかない筈もないと私は思

ふのである。而も敢へてその危険を冒しながら、猶ほ満農を対象とした、時としては単なる政策解説的な小説に腐心する所以のものは、全き君の満洲国に生活するものとしての社会的良心が君の文学と余りに強く結びつき過ぎ、ある場合寧ろそれを圧迫しやうとしてゐる為めではないだらうか。¹¹⁾

青木の創作動機とその意欲に賛辞を送りながら、素材を文学的レベルまで熟成しきれていない「この系列の作品群」への批判は、わたしも同意するところである。しかし青木の「満人もの」は、こうした「系列」だけに終わるものではない。

1-3 平々凡々たる庶民の群

ここまで取り上げてきた作品は、いずれも一つの政策をもとに、指導する側（日本人）と指導される側（中国人）との葛藤というパターンを逃れることはできなかつた。しかし、こうした政治を正面に据えた作品ばかりではない。「小さい蝸牛のやうな一家の生活を黙々と守り、いつの世も多く恵まれるといふことをしらない」庶民の生活を切り取った作品に見るべきものがあり、一つの「系列」と見なすことができる。

「青服の少女」

第一話（37年5月）

幼くして両親を失った芳梅は、行商人の祖父と祖母の手で育てられた。彼女が住む満人部落は、最近新しく建築された日本人住宅に取り囲まれるようになった。ある日、芳梅は物干しから飛ばされた浴衣を拾って、持ち主の日本婦人に手渡したが、

「……本当にちつとも油断もスキもありはしない……」

誰かと話し合つてゐるらしい今の婦人の痾高い声が塀の中から洩れた。

芳梅は、どういふわけかしらぬが、ふつと哀しみを覚へてきて、居なくなつた母親の名を呼んだ。（132—133頁）

芳梅に日本語が理解できたとは思えないのだが¹²⁾、その瑕疵を差し引いても余韻の残る作品である。

第二話（37年5月）

日本人の社宅に接した満人部落。冬には燃え残りの石炭や燃料となる木材、春になると、虫干ししてある冬物の衣服など、子供たちの窃盗が絶えない。一人の少年が盗みで捕まり、交番へ引きずられていく。「それを笑ひながら眺めてゐるのは、洋車夫や、通りがかりの同人種だ。」（138頁）

二話とも、日本人との貧富の差によって生じる軋轢を少女、少年の姿を通して描いている。

「砂塵」36年10月¹³⁾

煉瓦工場に雇われている張鳳山は、崩れた煉瓦の下敷きとなり大けがを負った。働けなくなった張の家に、寡婦と同棲して甘い汁を吸っていた××会社のトラック運転手権伯山が下宿人として入り込む。権はすぐに張の妻と肉体関係を結び、一家の主のようにふるまい始めた。娘の秀華もふがいない父に白い目を向けるようになる。傷が癒えても元の工場では雇ってもらえず、権の口利きで××会社の小使いの職を得る。妻を寝取られ、家庭では居候のような扱いを受けても反抗できないみじめな男の姿が描かれる。最後は、「張は秀華を抱き上げた。五つの娘は、彼になぢまない、冷めたい他人のやうな眼つきをしてみた。（中略）張の鼻先に水ツ洩が光つてゐた。」（159頁）という哀愁を帯びた文章で終わって

る。

「殺意」『作文』36年8月

早魃から凶作に見舞われ、耕作を老父と妻に任せて、曹は満鉄付属地にある××商社にボーイとして雇われる。しかしこの商社の社長は、鉱山や森林を売買する怪しげな山師で、不況を理由に賃金を支払ってくれない。3か月で給料の安い農園に転職するが、故郷に残した幼子が熱病にかかり重篤だという知らせが届く。薬代を送金するため未払い賃金を請求すべく商社を訪ねたが、姑に口汚くののしられ、曹はかっとなり傍にあった手斧を老婆の脳天に振り下ろしてしまった。

「土工苦力」(37年12月)

山東省にある故郷が洪水、蝗害さらには干害に見舞われて、劉は家族を残して北満へ出稼ぎに出てきて、苦力として働いてきた。冬の到来とともに土木工事も打ち切られ、劉は蓄えた小銭を懐に、奉天から大連を経て故郷へ帰ろうとしたが、文盲のかれはどの窓口で切符を買っていいのかわからない。そこへ「白い手の平」をした親切そうな男があらわれ、切符を買ってくれた。ところが切符は蘇家屯までのもので、劉はなけなしの金から追徴金を支払う羽目になる。

「一農夫」『作文』37年11月¹⁴⁾

孟家屯の小作人孟が県城へ収穫した玉蜀黍を売りに行く。ところが匪賊の密偵がつかまり、昔馬賊であったという蠟燭問屋に通匪の疑いがかけられ、軍隊が警戒に当たっていた。そこへ孟があらわれ、兵士に声をかけられたかれは動転して逃げ出し、逮捕されて留置場へ。心配した村人が孟を請け出しにきたときには、かれは気が触れてしまっていた。

これら4篇は、労働者、農民を素材としている。痛めつけられ、虐げ

られても抵抗する術もないかれらの生活を抒情の筆に溶かし込んでいく。

「不幸について」『新天地』36年4月¹⁵⁾

土木工事請負××組出張所で小使として働く孫青年。下痢と腹痛で早退させてもらった翌朝、隣家の馬車挽きの親爺が急な病で亡くなってしまった。孫は葬儀の手伝いを口実にも早退を願い出た。その翌日、病氣療養のため妻と一緒に実家に戻っていた娘の容態が急変し危篤に陥ったとの連絡が入る。数日の休暇と給料の前借を頼むが、主任はむべもなくはねつける。「孫は日本語が達者すぎるくらゐ巧くて調法だが、その日本語に時々騙されることがあつていかん」（68頁）といった主任の疑心暗鬼が、感情的に爆発したからであった。孫は、死に瀕する娘やそれを見守る妻のことを思い、涙を流しながら家路につくのであった。

「奇怪なる一日」『作文』41年9月

ある平凡な中国人サラリーマンの災難続きの一日を描いた。遅刻も多くあまり熱心とはいえない何子義は、出勤の途中乗っていた三輪車が横転し、したたかに腰をぶつけた。遅刻した何が出勤簿に捺印しようとする、出勤簿は臨時調査のため人事課に回されている。故郷の父親からは、送金増額を求める手紙が届いている。家に帰るとかれの名刺を持った男が、送別会の分担金と偽って妻から10円を徴収していったという。散々な一日が終わったかと思われたその深夜、末っ子が熱を出してうなされている。「どうやらいやなことは昨日一日では終止符をうたなかつたらしい」（225頁）という一文で終わっている。青木には珍しいユーモア小説である。

「暁闇」『満洲公論』43年12月¹⁶⁾

朝鮮国境に近い図們鉄警分所の現場から、奉天本社に転勤となった朝

鮮人金田昌樹（金昌樹）の話である。現場勤務と本社でのデスクワークの違いに戸惑いながら、同胞民衆への宣伝活動というなじまぬ任務を与えられる。金田は、「半島人」が結成した協和楽劇団の慰問巡回公演を引率することとなった。公演を終えたところで、劇団は解散に追い込まれ、主事が財産を独り占めして団員は路頭に迷うことになる。金田はまた同胞とのコネを巧みに使って、同郷人の就職を斡旋し、頼りがいのある人物として有名となる。その後かれは軍属として南方に出征したという風の便りが届いた。

「満人もの」という枠を離れるが、その行動や価値観に違和感を覚える朝鮮族の青年を描いた。「南方」への「出征」という終わり方に、金田の行く末を案じる作者の思いが感じられる。

国策の枠を離れて、平々凡々たる庶民の生活を描くとき、青木の筆はのびやかとなり、慈しみや哀感あふれる「満人もの」が紡ぎ出される。描かれた「満人」にも個性と表情が見えてくる。こうした一連の作品には、高い評価が与えられていいだろう。

2. 歌人としての青木實

青木は、短歌の世界から文学の道に入った。しかもその創作はかなり早かった。

短歌を作るようになったのは、大正の末年勤め先の満鉄東京支社の友人本吉丈夫君に勧められて、彼の属した土屋静男先生の「あしかび」に投稿するようになってからだ。おそらく十七、八才の頃だったと思う。¹⁷⁾

その後、短歌同好会「勁草社」に参加し、そのときの指導者宇都野研

を偲んだ「宇都野研先生」（33年5月）が作品集（D）に収められている。満洲時代は短歌同人の世界から離れるが、戦後国会図書館に勤めてからは館内に組織された「双樹短歌会」の一員となって月一回の例会にも出席している。歌の上でも、仕事の上でも先輩にあたる岩淵兵七郎に触れた回想記で、自分の短歌集『口籠り歌』を贈ったところ、岩淵から過褒とも思われる手紙をもらったことが記されている。

兄（青木實）の歌は憶良的であると云える。生活的、現実的である点において、しかもその写実には時に鋭く、こまやかで、又繊細である。そして何よりも、否第一に挙ぐべき特徴は「誠実と愛」の歌であることであり、この点においても現代の山上憶良である。まさに現代第一級の写実的の歌人であり、生活派歌人である。¹⁸⁾

「現代の山上憶良」という評価が正当かどうかはさておき、青木文学を、この短歌の世界の延長線上でとらえる人は多い。青木とともに『作文』を支えてきた秋原勝二は、その追悼号でこのように語っている。

だが、青木さんの本領は歌人であり短篇作家である。そのいのちは切り口の鮮やかさであり、言葉の適格さにある。それは短歌による日本語の美しさの吸収であろう。土壌には父母への屈折した思慕、妹への身をよじるほどに切ない愛情がある。不正を憎む心、弱き者に寄せる熱いまなざし、必死に努力する者への賞賛、黙々と走る見知らぬマラソン走者に行き遭った路傍でとつぜんひとり熱狂的に拍手する彼である。¹⁹⁾

秋原がいう「青木さんの本領」が最も発揮された作品集が『幽默』（D）であった。筒井俊一も『北方の歌』と比較してこのように述べている。

それが「幽默」になると、突然日本的な風情が溢れてくる。日本的なといふのでは漠然とするが、繊細な感じ方、愛情のもち方などといふ所に、「北方の歌」の強さと別個のものを見出すといふ意味なのである。小品などには特にその可憐なほどの感情が現はれてみて私はかふした一面に初めて接したのである。

「北方の歌」の方は日常描く満洲文学の観念的なもの、現はれであり、「幽默」の方は青木君の人間的な一面をむき出しにしたものであらうと思ふ。²⁰⁾

多くの人が称賛する『幽默』であるが、この世界を紹介するのは難しい。何が描かれているのかではなく、情景をどう切り取り、どう表現されているのかが大切であるからである。

作品集は5部構成である。

「第1部 旅や空」は、旅の記録やその土地の思い出をまとめたもので、9篇が収録されている。沿線の風景や車内での会話などが淡々と綴られているが、「南京物情」(38年12月)を取り上げてみる。日本軍の南京占領によって各地の政府機関や大学、図書館から接収された膨大な蔵書を調査・整理するために大連図書館から派遣されたときの道中見聞記である。「南京に平和の日が再び訪れて、もう十ヶ月に近い。」(22頁)と言いながら、建物は破壊され、廢墟の街となっている。ハンコの軸に「南京入城記念」と彫ったものや「歓迎! 皇軍サマ」という札を吊るした兵隊さん相手の店屋が営業を始めている。コンクリートで固められたトーチカを覗くと「一番高い位置に銃眼のあるところに、支那兵が一人ミイラのやうになつて仰向けに死んでゐた。」(29頁)と、激戦、虐殺のあった街並みが、ほとんど感情を交えずに描かれていく。最後の場面は、その朝未明に、鉄道爆破の工作がなされた場所を通過した際の車外の風景描写である。

僕らの列車が通過するとき、その沿線に点在する或る部落が焼かれてゐた。草葺きの屋根から、紫色の煙りを上げてゐる。ふと気づくと、林のかげの家からは、真赤な炎がメリメリと吹き出してゐた。それは稲が黄いろく、実を垂れてゐるいくつもの田を隔てた、家々であつた。しづかに燃えてゐるだけで、とほく稲田のはてを運河を往来する舟の白帆が、一つ、二つ、ゆるやかに動いてみえた限り、人影といふものが、全く見えなかつた。（32頁）

鉄路破壊を企てた残兵を掃討するための村落焼き打ちの現場であるが、青木の手にかかると、水彩画で描かれた農村のスケッチのようで、作者の戦乱に対する感慨は押し殺されている。

「第2部 私事抄」（11篇）、「第3部 貝殻」（22篇）は、いずれも渡満前の幼少期の思い出や渡満後の身辺雑記を綴った短篇である。「竹さん」（38年3月）江戸ッ子で気風のいい筆屋の職人竹さん。子供のころ映画をオゴツてもらったこともあった。後年、今はチンドンヤになっている竹さんに出会う。「僕を見つけると「やア！」となつかしさうに声をかけたが、直ぐ芝居がかつた口調で、「身は零落してこの始末」といふと、ドン！チヤチヤんと、太鼓と鐘をならしてみせた。」（112頁）

「車内で 二」（37年1月）5、6人の苦力が電車に乗り込み腰を掛けた。若い女車掌は、その中の一番汚れた着物をまとった男に「来！」と顎をしゃくって座席から立たせてしまった。「彼は一所懸命、前の方に首を垂れたり、後ろの方に手を回したりして、自分の着物の汚れを見ようとしてゐた。」（99頁）「郊外」（38年4月）某社の独身寮、瀟洒な洋式住宅、さらに日本人の果樹園に周囲を取り囲まれて、たった一軒取り残された夫婦二人だけの満人の農家。覗き込むと「その薄闇のたゞよつた家の中から、二人はちつと戸外の男を見つめた。眼には、不安とほんの微かな敵意を

たゞよはして。」(130頁)

いずれも一頁に収まるほどの短文だが、そこに漂うペースは十分に短歌の世界に通じるものがある。

「第5部 幽默」(17篇)は、フィクションを交えた掌編小説を集める。先に紹介した「土工苦力」、「奇怪なる一日」もここに収められている。「新線風景」(38年12月)新しく敷設された路線を走る列車に、2歳ほどの男の子を抱えた日本人と中国人2組の夫婦が、偶然向かい合わせの席に腰を下ろした。子供たちは、スチームで曇った窓ガラスを拭きあうことで親しくなる。ビスコを分け合って食べたりしていたが、日本人の子供が相手の手を引っ張り泣かせてしまう。日本人の母親は子供を叱りながら、中国人の子供を抱き上げたが、その子は小便をちびつて膝を濡らしてしまう。「満人夫妻は、さつと顔の色を変へた。頬の線を固く硬ばらした。」(254頁)しかし、日本人の細君は笑って応え、夫は「不要緊、不要緊」と繰り返して、二組の夫婦は笑顔で別れた。「喪服」(33年4月)友人の宇田君が女性店員に惚れてしまった。かれは便箋10数枚になる「小論文といつて恥ずかしくない」恋文を送った。彼女からは「電報のやうな」断りの手紙が届いた。宇田君は夏だというのに、黒サージの服をあつらえ、これは僕の喪服だといって、街を闊歩している。

些細な日常生活の一こまを鮮やかな切り口で取り出し、抒情溢れる掌編にまとめ上げる。青木文学の真骨頂といえるだろう。

「第4部 一家抄」(15篇)ここには、両親や義兄、妻や子どもなど肉親にまつわる作品がまとめられている。「父の原稿」『大連新聞』(34年3月)両親を連れて大連に移住したが、何もすることがない無聊な父を見かねて、「僕」が日露戦争の回顧録でも書いたらと勧めると、小学校も出ていない父は一か月近くも費やして14枚ほどの原稿を書き上げた。しかし、その原稿は活字になることもなく、今も「僕」の机の引き出しに眠っている。「土筆摘み」(33年8月)友人と散歩中、土手で土筆摘みをしてい

る人たちに出会った。その土手に兵隊さんが使うような大きな水筒が落ちていた。家に帰って妻に拾ってきたよ、と見せると、「なぜかしらんが顔を赤くして、いやよいよと羞かしがった。安サラリイマンはこんなことでもなかつたら臨時の収入なんていふものは一つもないんだぜ。」(145頁)と「僕」は答えた。次の日曜日、妻と二人で土筆摘みに出かけたが、その弁当包みの底にはあの水筒が忍ばせてあった。

なお、秋原がいう「土壤には父母への屈折した思慕、妹への身をよじるほどに切ない愛情がある」という評語は、青木の私小説「父の記」『作文』42年12月、「父との間」『作文』33年12月、「^{ゆかり}由縁の人々」『新天地』43年1月（以上はいずれも『旅順・私の南京』所収）などを踏まえて語られたものであろう。青木一家の家族構成は複雑であり、肉親同士の愛憎の葛藤の中でかれは育った。上記「父の記」を参考に、その家族史をまとめてみる。

日露戦争の旅順総攻撃に白襷隊の一兵卒として参加した父親は、帰国後10歳年上の母親と結婚する。母にはすでに長男と二人の娘があったが他家に預けられる。結婚後、青木本人と妹が生まれる。^{ちやうな}手斧の鍛冶職人であった父は、関東大震災で家を失い、新たに金物屋を始める。翌年、生母は喘息に苦しみながら腸チブスに罹って死亡。父は再婚し、妹は芸妓屋へ引き取られる。父は梅毒から盲目となり、商売にも失敗して、青木が両親を連れて渡満することになる。その後、義兄が東京で一膳飯屋を開き、両親を引き取るも、2年後に義兄が死亡し、すでに結婚していた青木が再び両親を引き取ることになる。大連に両親と妻、それに3人の幼子を残しての奉天への単身赴任となるが、1年ほどで家族社宅が与えられ一家そろった生活を送ることになる。その奉天で敗戦を迎える。

こうした複雑な家族史を描き出した最後に、主人公謙吉（青木）はこのような思いにたどり着いたのであった。

自分の好き勝手なことをしてきた俺だといふ……だが、父の一生を思ふと、やはり不自然な結婚が、大きく影響を与へてゐるやうに謙吉には思はれてくるのだつた。そしてその不自然な結婚によつて生まれ出た謙吉、マキ。それから早く父に死別し、母からも別れ別れに育つた謙吉の三人の義兄義姉。さういふ不自然な結婚をしなければならなかつた、謙吉、マキの母。人生を誤まつた気の毒な父、不幸で可哀さうだつた母。謙吉は次第にさう思ふやうになつてきてゐた。(122頁)

青木はこの『幽默』の「あとがき」で、「今度校正で読んで見て、自分の関心を持つて描いている世界が、人生の落魄面とでも呼ぶべき方向に在ることをはじめて気づき、やはり性格の根ざすところは争はれぬものと感じた。」(282頁)と述べているが、この作品集全体を覆う哀愁の基調音は、不幸で恵まれぬ家族の中で培われた「性格の根ざすところ」から生まれたものといえるだろう。

青木文学の本領は、政治的なものからは程遠いところでひっそりと紡がれてきたといえるのではないか。しかし満洲の地で太平洋戦争の勃発を迎え戦時色が強まる中、かれもまた「聖戦完遂」の大合唱に巻き込まれていく。(E)に収められた「時論抄」は、すべて戦争協力を呼びかけた評論であつた。戦争勃発一周年を迎えた一文を引用しておく。

文学はその特質たる人間の感情に訴へるところの立場より国民の聖戦貫徹、米、英への憎悪感、その撃滅について思想、感情の統一集中に向つて全面的に機能を發揮しなければならない。(中略)

文学の永遠を説いて、眼前の問題にかかずらうことを潔しとしな

いのが、最も純粹に文学を擁護し、文学的に生きたかの如き見解を採るものは、文学至上主義乃至芸術至上主義の灼印の下に今日に在つては抹殺し去るべき徒輩と自分は信ずるものである。²¹⁾

青木の正義感が、そのまま戦争協力の号令に乗り移ったような勇ましい文章であるが、青木にはそれを実践に移す力はなかった。43年1月に関東軍報道隊演習に派遣され、ルポルタージュの形で発表した「国境の兵」²²⁾を除いては、「吉林」『作文』（40年7月）が目につく程度である。これは大戦勃発前に書かれたものだが、吉林を舞台とした歴史小説である。吉林の歴史的沿革史を軸にしながら、日露戦争、その後の邦人居住権獲得、初代領事の着任と、吉林の日本人史が語られている。しかしこの大河小説を予測させる長篇も「前篇」で終わっている。

この小説は、こゝで終つてゐるのではない。（中略）

吉林、そこに日本人が幾多の辛酸を尽くし、民族共栄を理想とし、根強く延びてゆくためには、尚ほ幾多の障害と困難があつた。満洲帝国建国といふ光栄の日を迎へるまで、なほ幾多のエピソードを展開しつゝ、物語られなければならない。（73頁）

満洲旗人韓家の三男紀沢を登場させ、壮大な歴史に絡んでくることを予感させるが、後編が書かれたという痕跡はない。フィクションを交えながら歴史絵巻を完成させるだけの力量は、青木にはなかったといわざるを得ない。「文学至上主義」を抹殺し、「聖戦協力」の声を大きくすればするほど、かれの筆は停滞の道をたどらざるを得なくなった。

3. 戦後の青木實——復刊『作文』のこと

青木は、44年4月の移動で鉄道総局から奉天鉄道局の一係長に転出し、列車運行の現場担当であったことから応召を免れ、敗戦後も長春鉄路公司関連の仕事に就き、夫婦と5人の子供、青木の両親、妻の母親ら一族を引き連れ、46年9月に無事日本へ引き揚げることができた。

一度は、故郷を満洲国と定め、そこに骨を埋める人生だと決意した人びとが、すべての財産を捨て、身一つで落ち着き先も定かでない日本に引き揚げる——敗戦と満洲国の崩壊は、みずから起こした侵略戦争のあまりにも大きな代償をもたらすこととなった。

戦後無事日本へ引き揚げてきた『作文』同人も、各地に散らばり、文学を云々するどころではなかったのだが、それぞれの生活が安定するとともに、『作文』復刊の機運が生まれてくる。

戦後の『作文』復刊に触れる前に、満洲国で刊行された同人文芸雑誌『作文』についてまとめておく。まず竹内正一は、大連図書館に移ってきた青木についてこのような、回想を残している。

満鉄東京支社から青木實君が入ってきた。その若々しさに溢れるような笑顔は沈滞した大連図書館の空気にも一抹の清風を送り込むような思いがあり、彼の清新な文章や短歌の才能は満鉄の機関誌「協和」の一頁を飾り同好の士は日に日に彼を取りまいて新しい文学グループを形成していった。²³⁾

その館員だけを集めた文学グループの一つから『線』という「小型の文学パンフレット」が生まれたとするが、その後、在連の詩人グループも糾合して『作文』という同人組織に発展したことは、冒頭の「略伝」に示したとおりである。隔月刊の雑誌を維持することは容易ではない。第6輯（33年12月）を出したところで同人組織が解散し、解散に納得しない青木と安達義信が、二人だけでわずか4頁の第7輯（34年2月）を

刊行するという危機もあった。しかし、同人の結束はこの危機も乗り越え、39年ごろからは100頁を超える雑誌へと成長する。第40輯（39年11月）は、記念号として320頁の大冊となった。第50輯（41年7月）に掲載された会員名簿には29名の名前が載っている。2000部程度の発行部数であったが、寄贈分を含めほぼ完売したという。会費収入に頼ることなく、「作文叢書」と銘打って同人の詩集や小説・随筆集も発行できるだけの財政力量も備えるようになっていた。当初は大連在住者を中心としていたが、その後同人が満洲全土に拡散し、そうした現状に合わせるため発行所を関東州大連から奉天に移す申請手続きをしたところ、雑誌の整理統合を進めていた満洲国により継続は認められず、第55輯（42年12月）を「終刊号」としてその幕を閉じたのであった²⁴⁾。同人色が強く、セクト的だとの批判もあったが、文化未成熟の満洲国にあって、作文叢書も含めた文学活動の成果は、大きなものがあったといえるだろう。

さて、52年ごろから東京在住の『作文』同人が集まりを持ち始めたという。各地に散在する同人の消息も明らかになった63年11月、島根県津和野在住の町原幸二が、ガリ版刷りの『作文通信』を発行、連絡のつく20名足らずの会員に郵送された。これは8号まで月刊で発行されたが²⁵⁾、これで一気に再刊の機運は高まり、64年8月、復刊『作文』創刊号が出された。発行所は東京久留米町にあった青木方、37頁、頒価100円、同人23名の出発であった。「復刊」の華々しい挨拶もなく、終刊号の体裁をそのまま引き継いだような静かな船出であった。巻末に添えられた青木の「『作文』復刊について」という文も、「“作文”復刊のまことにささやかなその第一号を、古川賢一郎、吉野治夫、日向伸夫にまず捧げたい。」（37頁）と、すでに死亡の報がもたらされていた同人への追悼の言葉で締めくくられている。いかにも『作文』にふさわしい再出発であった。

戦後の『作文』は同人の結びつきを大切にした。同人の誰かが作品集

を出版すると、必ず雑誌で取り上げ書評しているし、誰かの訃報を聞くと追悼特集を組んでいる。『作文』第208集（2014年7月）に「物故同人表」として、亡くなった同人の死亡年月日と、追悼特集を組んだ『作文』の号数が記録されている。ここでは、その同人の氏名だけを掲げておく。

木崎竜（仲賢礼）、野川隆、日向伸夫（高橋貞雄）、加納三郎（平井孝雄）、吉野治夫、古川賢一郎、坂井艶司、安達義信、長尾辰夫、中山美之、長谷川濬、竹内正一、舟橋破魔雄、三宅豊子、滝口武士、落合郁郎（落合利巨）、八木橋雄次郎、麻生鍊太郎、中川俊夫（佐々木正）、高木恭造、大野沢緑郎、古屋重芳、福家富士夫、島崎恭爾、宮井一郎、上野凌弘、町原幸二、大森志郎、宗英子（宗エイ）、中尾彬、池淵鈴江、富田寿（高橋敏夫）、江頭正子、青木實、大谷健夫（大谷武男）、城小碓、浅川淑彦、小杉茂樹（小杉福次）、井上郷（井上三郎）、吉田紗美子、佐々木和子、松原一枝（古田一江）計42名

この終刊号に記載されている『作文』同人は、わずかに3名。その中の秋原勝二が、2015年4月17日に亡くなって、『作文』は自然死のように静かに息を引き取った。

満洲そして文学を唯一の紐帯として、創刊から82年間、間に20数年の中断をはさみながらも同じ同人仲間の手で雑誌が継続されたことは驚嘆すべきことである。青木實は後半の10数年間を見届けられなかったが、この長い『作文』の歴史を底辺で支え続けた一人であった。満洲国での55冊、戦後の153冊、在満作家たちによって築き上げられた膨大な記録の価値に思いを致すとき、青木の果たした功績に、わたしは頭を下げざるを得ない。

復刊『作文』において、青木は妹の死や妻の看護といった家族のことや、満洲の回想、身辺雑記など、『幽默』の世界を延長した抒情的散文を数多く残している。さらにライブラリアンとして「満洲文芸資料」という関

連資料の発掘・紹介に力を注ぎ、「作文ノート」という形の記録集などに力を入れ、忘れられつつある満洲国の実態を後世に伝える作業に精力を傾注している。こうした青木の努力を含め、復刊『作文』は、満洲国を再検証するうえで、掘り尽くせぬ宝庫を提供してくれている。

むすびに

わたしは在満中国人作家王秋蛩氏から、奉天を拠点に活動していた『文選』同人と、在奉『作文』同人が日中作家の座談会を開く機会があり、座談会が終わって帰る途中、日向伸夫から「日本帝国主義の侵略行為に大変不満だ」との言葉を聞いたという主旨の手紙をいただいた。それを翻訳して青木氏に送ったところ、青木氏は日向氏の言葉にこだわりを示し、「しかし漠然とだが、釈然としないものが私の頭の中に消え残っている」として、こう続ける。

私には、異国人の前では言えない言葉である。もし真実そう思うなら、それに対して自分は反対の行動の何をしてきたであろう。少くとも形の上では、そのお先棒を担ぐ仕事の一端に参加しているだけではないか。

王秋蛩の記憶する、日向の言葉が正確であったかどうかはさておき、帝国主義的侵略行為の一端を担っていたとの自覚をもっていたならば、被侵略者の前では口にできない言葉だと、青木はいう。また同じ文章の中で、王秋蛩たちは、日本人に対して「猥りに馴染もうとしない」人たちであったとして、「同じような心の負い目はむしろ我々日本人にこそ多分にあり、殊に私はその気持ちが勁かった。」²⁶⁾と自省の弁を述べている。

もちろん、戦後になって書かれた文章であり、当時こうした立場が明

確に意識されていたかは疑問である。しかし「満人もの」の主張の中にも、中国人を素材とした作品の中にも、なにがしかの「負い目」を感じて生きている青木を見出すことは可能であると思う。

正義感と義務感に突き動かされて執筆された、「社会的良心」が突出したような「合作社運動」、「愛路運動」に材を採った系列作品には、芸術的昇華が足りなかった。そして抒情的短歌の延長線上にある『幽默』の世界が、青木文学の「本領」であるとするならば、「庶民の群」系列の作品は、その豊かな抒情性ゆえに、青木の「本領」が発揮された「満人もの」といえるだろう。そして弱者、虐げられし者への同情、憐れみにとどまらず、植民地に生きた日本人の「負い目」も滲み出た作品群と評価できる。

最後に、本文でも引用したが、戦後出版された青木の作品集を掲げておく。すべて非売品であるが、在満時代の作品も多く収録している。

『満洲にて』（小説集）作文社 80年7月10日

『旅順・私の南京』（小説集）作文社 82年12月1日

『外地・内地拾遺』（随筆・小説集）作文社 93年5月20日

『口籠り歌』（歌集）作文社 第1集～第4集 73年12月～95年12月

『小歌文集』（歌論集）95年12月22日

注

- 1) 「幽默」とは、中国語で「ユーモア」を意味する。『花筵』に収録される15篇の随筆はすべてここに採録されている。したがって、『花筵』の増補版ともいえる。検閲で削除された「奇怪なる一日」を補充して、『幽默』武蔵野書房（97年2月5日）が再刊されている。
- 2) 「あとがき」『北方の歌』364頁
- 3) 「北満の空」39年10月 40頁『幽默』所収
- 4) 「綏化への旅」43年7月 259、260頁『文芸時論集』所収
- 5) 「北辺」4部作は最初、以下のように分割して発表された。第1部『満洲浪漫』

- 39年12月、第2部『作文』39年11月、第3部『新天地』39年12月、第4部『作文』40年1月
- 6) 上野市三郎「青木實著『北方の歌』寸評」『満洲芸文通信』2-3 43年3月 78頁
 - 7) 「呼倫貝爾」の初出は『東辺道』（第2号 39年12月）であるが、『北方の歌』に収録されるとき、削除された箇所がある。本論で引用した「射ち殺した」、「我々が許可証を取り上げたら……」という表現は削除されている。拙論「消し去られた日本語」『続 文学にみる「満洲国」の位相』研文出版（2013年8月）参照
 - 8) 「旅順」『作文』78年6月 55頁
 - 9) 「愛路運動雑話」2頁『部落の民』所収
 - 10) この作品は『満洲国各民族創作選集』第2巻 創元社（44年3月）にも収録されている。
 - 11) 竹内正一「青木實著『北方の歌』出づ」『北窓』5-1 43年3月 116、117頁
 - 12) 戦後刊行された『満洲にて』には、「青衣の少女A」『満洲グラフ』（37年5月）として収録されているが、「浴衣」が「ハンカチ二枚」に、「芳梅はどういふわけかしらぬが」という部分が「芳梅は、何を言われたか、その意味もわからぬまま」と、書き換えられている。
 - 13) これは最初「張といふ男」と題して、『満蒙』17-4（36年4月）に発表された。『作文』に再録されるとき、大幅な削除が行なわれている。権と張の妻の肉体関係を暗示する場面が多いのだが、前掲「消し去られた日本語」で詳しく論じている。
 - 14) この作品は、作品集『庙会』竹内書房（40年5月）に収録されている。
 - 15) この作品は、「孫の不幸」と改題して『満洲文芸年鑑』第1輯（37年10月）に収録されている。
 - 16) この作品は、戦後「金昌植」と改題して『作文』（70年3月）に再録された。
 - 17) 「終りに」『口籠り歌』作文社 73年12月 144頁
 - 18) 「岩渕兵七郎さん」『旅順・私の南京』126、127頁
 - 19) 秋原勝二「その人は」『作文』97年9月 42頁
 - 20) 筒井俊一「文芸時評——文学出版と作品評」『満洲芸文通信』2-7 43年8月 33頁
 - 21) 「大東亜戦争と満洲文学」42年12月 9、10頁『文芸時論集』所収
 - 22) 『北の護り——関東軍報道隊作品集』満洲新聞社 43年11月。並びにその第

- 5章以降を基に書き換えた「小さな記録」『新天地』（43年4月）がある。
- 23) 竹内正一「『線』と当時の人々」『作文』第81集 70年10月 12頁
- 24) 『作文』第50輯（41年7月）に掲載された「作文総目録」（第1輯～第49輯）を参考にしている。現在手に入る戦前の『作文』は23冊程度である。
- 25) 西原和海編『満洲引揚げ文化人資料集』第4巻 金沢文圃閣（2016年3月）所収
- 26) 「二人の友」『作文』137集 87年7月 9、10頁

* 論文執筆にあたっては、西原和海氏から貴重な資料の提供をいただいた。ここに感謝の言葉を申し添えておく。

<島津幸子さんを偲んで>

2010年わたしが定年退職を迎え、バトンを引き継いでくださったのが島津さんでした。老兵が去り、フレッシュな息吹を中国語教育に吹き込んでくださるものと大いに期待していました。仕事を共にすることはありませんでしたが、お会いした折、まじめな学生さんが多くて教えがいがあります、と明るい笑顔で話してくださったことを思い出します。中国語教育陣に欠けていた語学の専門性を生かして、立命館中国語教育に貢献していただく課題は多くあったろうに、あまりに早いご逝去は悔やまれてなりません。拙い論文をご霊前に捧げます。

（合掌）